

---

# 変動費と固定費の具体例

青山公認会計士事務所

平成15年8月8日

---

## 製品Aのコスト情報

製品Aを1個作るに必要な資源	
材料費	3,000 円
製造間接費	200 円
直接費計	3,200 円
作業時間	2 時間

製品Aを1個生産するのに必要なコスト情報は左表の通りです。この他に工場のコスト情報は次のようになっています。

- ・工員数: 10人
- ・1ヶ月の作業可能時間は200時間 / 人
- ・減価償却費や工場賃貸料などの固定費が50万円 / 月
- ・工員に対する給与は月給制20万円 / 人の定額です。

また、製品Aの販売価格は7000円です。

# 7月の生産・販売状況

7月の生産・販売状況は次の通りでした。

月初在庫0個、当月生産量800個、当月販売量800個、月末在庫0個

よって、7月の月次損益計算書は次のようになります。

売上高		5,600,000
売上原価		
月初製品有高	0	
当月製造原価	5,060,000	
計	5,060,000	
月末製品有高	0	5,060,000
営業利益		540,000

当月製造原価の計算プロセス

1. 直接費(変動費)

$3,200 \times 800 \text{個} = 2,560 \text{千円}$

2. 固定費

給料20万円  $\times$  10人 + 減価償却  
費等50万円 = 2,500千円

3. 上記より、 $2,560 \text{千円} + 2,500 \text{円}$   
= 5,060千円

# 8月の生産・販売状況

8月の生産・販売状況は次の通りでした。

月初在庫0個、当月生産量1,000個、当月販売量800個、月末在庫200個  
よって、8月の月次損益計算書は次のようになります。

売上高		5,600,000
売上原価		
月初製品有高	0	
当月製造原価	5,700,000	
計	5,700,000	
月末製品有高	1,140,000	4,560,000
営業利益		1,040,000

当月製造原価の計算プロセス

1. 直接費(変動費)

$3,200 \times 1,000 \text{個} = 3,200 \text{千円}$

2. 固定費

給料20万円  $\times$  10人 + 減価償却  
費等50万円 = 2,500千円

3. 上記より、 $2,560 \text{千円} + 2,500 \text{円}$   
= 5,700千円

また、8月は生産した1000個すべてが販売されずに、200個が在庫として月末に残っていますので、月末製品有り高は1140千円(=  $5,700 \times 200/1000$ )となり、売上原価は差し引き4560千円となります。

# 9月の生産・販売状況

9月の生産・販売状況は次の通りでした。

月初在庫200個、当月生産量600個、当月販売量800個、月末在庫0個

よって、9月の月次損益計算書は次のようになります。

売上高		5,600,000
売上原価		
月初製品有高	1,140,000	
当月製造原価	4,420,000	
計	5,560,000	
月末製品有高	0	5,560,000
営業利益		40,000

当月製造原価の計算プロセス

1. 直接費(変動費)

$$3,200 \times 600 \text{個} = 1,920 \text{千円}$$

2. 固定費

$$\text{給料} 20 \text{万円} \times 10 \text{人} + \text{減価償却費等} 50 \text{万円} = 2,500 \text{千円}$$

3. 上記より、 $1,920 \text{千円} + 2,500 \text{千円} = 4,420 \text{千円}$

# 7・8・9月の月次損益計算書

7・8・9月の3ヶ月の月次損益計算書を並べてみましょう。

そうしますと、この3ヶ月の販売数量は同じで、売上高は変わらないにも係わらず、売上原価の金額は3ヶ月とも異なり、その結果、営業利益の金額が毎月増減しています。

	7月	8月	9月
売上高	5,600,000	5,600,000	5,600,000
売上原価	5,060,000	4,560,000	5,560,000
営業利益	540,000	1,040,000	40,000
製品1個の 売上原価	6,325	5,700	6,950

なぜ、このように営業利益が毎月増減するのかといいますと、製品1個に含まれる固定費の金額が毎月異なるからです。

# 固定費とは

固定費とは、生産数量に係わりなく毎月(每期)発生するコストです。このケースの場合、従業員の給与は月給という定額支給ですので人件費は固定費です。また、減価償却費や工場の賃貸料も毎月の発生額はあらかじめ決まっていますので、こちらも固定費です。

各月別に製品1個あたりの固定費の金額を計算してみますと次のようになります。当然ながら、生産量が多いほど製品1個あたりの固定費は少なくなります。

	7月	8月	9月
毎月固定費	2,500,000	2,500,000	2,500,000
毎月生産量	800	1,000	600
製品1個固定費	3,125	2,500	4,167

ちなみに7月と8月の営業利益の差は50万円ですが、この50万円を分析しますと(7月の製品1個あたりの固定費3125円 - 8月の製品1個あたりの固定費2500円) × 販売数量800個 = 50万円となります。

## 作りだめで利益を出す

---

決算月には受注量や販売見通しよりも多くの生産をし、在庫を膨らませることで利益を出すという手法があります。これは生産量を多くすることで期末在庫に固定費を多く配分することで、売上原価に配分される固定費を少なくすることで営業利益を膨らまそうとするものです。つまり、変動費と固定費の性質を考慮した利益増加策といえます。

ただし、現代のように製品のライフサイクルがますます短縮化する時代においては当期は作りだめで利益を出しても、次期は製品の陳腐化などで評価損や廃棄損が増加し、結局は変動費分だけのキャッシュが流出し、事態を悪化させるだけとなってしまう。